

当事者研究と社会科学の接点：文化人類学との比較から

狩野 祐人 (Yuto Kano)

慶應義塾大学

従来、当事者研究の他の科学分野との関係はしばしば、医療分野等における共同創造への貢献という文脈で語られてきた。ここで主に焦点が当たってきたのは、たとえば自閉スペクトラム症についての研究にみられるように、当事者研究による仮説生成と自然科学的な研究を組み合わせることであった。

しかし当事者研究の代表的な実践者・理論家である熊谷晋一郎が論じるところによれば「当事者研究では、研究発表という形で外部に対して積極的に語りを公開することで、多数派が構築している社会規範や知識 […] が徐々に変化していくことも視野に入っている」(熊谷 2020, p.57)。このように当事者研究が、自己と同時に社会をも視野にいた実践だとすれば、自己の真理を求める当事者研究の実践が、同時にいかに社会についての知識を産出し得るのかという観点から、当事者研究と既存の社会科学との相違点について検討することができる。

この際比較の対象となり得るのが社会科学の一分野である文化人類学である。文化人類学は、かつては自然科学をモデルとし、特定の民族社会を体系的かつ客観的に記述した民族誌を作成することを目指していた。しかしとりわけ 1980 年代以降そうした古典的な民族誌は、様々なレトリックや権力関係に基づき、調査者のポジショナリティや多声的な現実を抑圧し作り上げられたフィクションであると激しく批判を浴びてきた。また同時に、異文化のインフォーマントを過剰に他者化し捉えてきたことも問題視された。この結果、調査者とインフォーマントのやり取りに焦点化した対話的な民族誌や、著者自身の経験に焦点化するオートエスノグラフィといった方法も模索されることとなった。社会や文化についての知識を得るための方法の一環として、このように自己記述をも含む様々な方法をも検討するに至った人類学の歴史は、当事者研究の社会科学的な意義と課題について論じるためのヒントを提供し得る。

よって本発表では、1980 年代以降の文化人類学における民族誌論と当事者研究を比較し論じる。この際、検討の焦点とするのが、1990 年代以降人類学において大きな影響力を持つ、苦悩の人類学と呼ばれる潮流である。苦悩の人類学は 1992 年人類学者 J. Davis により命名された潮流であり、古典的な人類学のように社会構造や文化形態に焦点をあてるよりもむしろ、貧困、災害、戦争、疾病、障害などの影響下にある人々の生を描くことを目指してきた。

この時重要なのは、苦悩の人類学が、従来の西洋近代に対する「他者」についての研究としての人類学への自己批判に基づく点である。人類学者 J. Robbins が指摘するところによれば苦悩の人類学が隆盛した背景には、人類学において知識生産の基盤となってきた「他者」「未開人」について語ることが 1980 年代以降難しくなってきたという事情が存在する。これに対し苦悩の人類学は、人々が遭遇する様々な困難や、苦

悩のうちにある人間の普遍性を描くという形で、人類学的な知識生産を新たな形で正当化したものとみなされる。しかし苦悩の人類学に対しては、それが人間の生の多様性を捨象し画一化しているのではないかといった批判もなされている。よってここでは、いかに研究対象である苦悩のうちにある人々を、より大きな社会的問題との関係において位置づけ表象することができるかという問いが、常に問われ続けてきた。

ここから本発表は、「他者」の学問としての人類学における自己批判として台頭してきた苦悩の人類学に焦点を当て、その代表的な著作と、それに対する批判を概観する。それを踏まえ、あくまで「他者」についての研究に留まった苦悩の人類学と対照して、自己の学問としての当事者研究が、いかなる社会についての知識の生産の可能性に開かれているかを検討することを目指す。

参考文献

熊谷晋一郎：当事者研究—等身大の〈わたし〉の発見と回復—。岩波書店,東京.2020.